

特集  
青森  
～雪と共に生きる人の知恵～

Special Features  
AOMORI  
Snow country wisdom

冬の暮らし

Life in winter

## 冬の暮らし

これからの課題は雪道歩道

杉山陸子

SUGIYAMA Michiko

企画集団ぶりずむ代表/  
「北国のくらし研究会」雪みち観察会委員長



### 1—どっさり雪の青森市

太宰治の『津軽』の冒頭に津軽の雪として「こな雪、つぶ雪、わた雪、みづ雪、かた雪、ざらめ雪、こほり雪」が書かれている。前の四つは降る雪で、残り三つは積もって変化した雪だ。ほかに吹雪、地吹雪など、降る雪の状態を表現する言葉もある。太宰の故郷金木など津軽新田地域は地面から吹き付ける地吹雪の名所で、一夜にして吹きだまりの丘「ナガレ」ができあがることもある。「ナガレ」が道に出来れば現代のように除雪の機動力もない時代には、しばしば道路は不通になったようだ。



■写真1—豪雪の青森市

『津軽』には書かれていないが、私の好きな雪は「ぼたん雪」。春近しを告げるように、花びらのような大きな雪片がふわりふわりと舞うように降る。

雪は変幻自在。一つ峠を越えれば降る雪質も、積もり方も、積雪量も、解け方も違ってしまふ。

青森県の日本海側にある津軽地方は、太平洋側の南部地方と比べて雪が多い。その同じ津軽でも青森市と弘前市では、雪の量も降り方も違っている。城下町弘前市は比較的雪が少ないが、明治維新を契機に県庁所在地となって肥大した青森市は異常に雪が多い。

弘前は岩木山の陰で、お山に守られて雪が少なく、青森はシベリアからの寒風が八甲田山にぶつかって、どっさりたっぷり雪が降る。弘前の物知りお婆様の言葉を借りれば「お殿様は青森だけんた雪のいっぺ降るどこさは、お城は築きません。なんたって弘前はご城下ですから、ねはー」なのだ。

青森市は雪を知らない明治政府が本州と北海道とを結ぶ便利な拠点として、雪を考慮せずに地図で決めた県庁所在地である。そのツケを青森市民は今も払い続けている。人口30万としては世界一の豪雪都市なのだ。

自動車が交通の主力となってから、そのツケがことさら大きのし掛かる。行政も市民も大変なのだ。そして、雪は自然現象。毎年同じように降ってくれないことも、そこに住む者にとっては悩みである。

平成16年と17年の冬は近年にない豪雪だった。これまであまり2年連続の豪雪はなかったため、次の冬は少雪だろうと期待していた。ところが平成17年も11月早々に降りはじめ、その雪がそのまま根雪になってしまった。秋じまいもそこそこ、まだ冬支度もできていなかった。予想を超える展開は、雪に慣れた青森人をも慌てさせた。地球温暖化現象の影響だろうか、暖冬少雪が続い



■写真2—黒石市の「こみせ」



■写真3—危険な車道を歩いての通学

たかと思えば記録的な豪雪というように、近年は特にいろんな降り方をする。予想がつかない。次の冬はどんな降雪になるのだろうか。

### 2—黒石市の「こみせ」は雪道文化の象徴

青森は豪雪都市だが雪降る地方の暮らしは営々と続いている。大きさに言えば縄文時代からだ。

雪国ならではの文化は多いが、雪に閉じこめられないための工夫として、雪の上を歩くためのカンジキなども、遙か昔からあった道具だろう。

雪は道を閉ざし暮らしを閉じ込めるが、自由な道を作ることもある。雪の無い季節には深い森や谷が、雪に覆われ、晩冬から春にはその雪がかた雪となってどこへでも沈まずに行き来できるようになる。遠まわりして行くしかなかった山向こうの集落がその季節だけは近場の集落となる。かた雪は山奥の巨木を運び出す道にもなった。

鉄道や自動車など交通機関の発達で地域間の距離を劇的に変えたが、雪はそれらの便利さを阻む存在でもある。自動車が普及しても車道の除雪が行われるようになるのは昭和30年代以降。それまでは馬そりが冬の地域間の交通手段だった。道路に冬中積った雪を春近い3月、日を決めて町内一斉に「雪切り」をする。町内総出で春の道路を切り出し、自動車が走れるようにする。

雪国の道の工夫で感心するのが「こみせ」である。

「こみせ」は通りに面した商店が協力しあい軒をつないで誰もが通れる通路として提供しているのだが、その土地は個々の商店の私有地ということが驚きである。

「こみせ」があるから雪の日も気軽に往来し、買い物に人が集まる。こうした地域の人々の連携による雪国独特の歩道「こみせ」が藩政時代に生まれ利用されていた。「こみせ」は雪国の知恵と思ひやりが作り上げた傑作だ。

以前は津軽地方の少し大きな町へ行けば、中心街には必ずといっていいほど「こみせ」があったが最近では少なくなってしまった。

弘前市の中心商店街土手町も少し前までは「こみせ」だった。全部が昔ながらの「こみせ」ではないが、その面影を残していた。しかし最近の再開発で、都会的でスマートな商店街に変貌した。

青森市にも震災で焼け残った造り酒屋の前に「こみせ」が昔のまま残っていて、「こみせ」があったのを教えてくれる。

それぞれの商店や会社が店先を提供し連続して歩道の役割を果たす「こみせ」が、藩政時代の面影を残したまま、暮らしのなかに残っている黒石市の「こみせ」は奇跡的な存在だ。しかし連続して残っているのはこの地域の人たちの並々ならぬ努力の結果なのだ。「こみせ」の一軒が廃業して途切れそうになった時、有志が出資しTMO津軽こみせ(株)を立ち上げ、買い取って事業を行い途切れさせなかった。こうした努力が実って、平成17年に国の伝統的建造物保存地区に指定された。

「こみせ」にしても「雪切り」にしても、地域の人たちが協力し足並みを揃えなければ成り立たない。雪がコミュニティーの円滑油になっているのかもしれない。

### 3—「雪みち観察会」の活動

車道除雪されるようになって、長い間、車道は雪の深いわだちがあり、滑り、デコボコが当たり前だった。ハンドルを取られぬように必死に運転していた。降雪の多い冬は何度も雪のわだちに埋もれ渋滞を発生させ、脱出に自動車を押しもらい、また押し上げてもらった。車道除雪がいきとどき、我家の自家用車も四輪駆動となり、最近ではそんな記憶も忘れがち、雪道でも支障なく



■写真4ーバス停留所の融雪

走れるのがごく普通になってきた。雪道のたいへんな進歩である。

現在は、記録的豪雪の年は別として、車道除雪は迅速に行われ、排雪もタイミングよく実施される。しかし歩道除雪はどうしても後回しになる。車道除雪の雪が歩道を覆ってしまうこともある。お年寄りや通学児童が車道を歩かなければならない箇所は多く、歩道除雪がこれからの雪道の課題だ。

青森市は中心商店街や官庁街などに冬期バリアフリー計画を策定し、歩道融雪装置が順次施工された。青森市の中心を東西に通っている国道4号、国道7号には県庁や市役所、裁判所などがあり冬期バリアフリー計画の範囲になっている。平成14年、その整備の段階で国土交通省青森工事事務所の担当課長から、一番多く利用する生活者の意見を聞きたいといわれ「雪みち観察会」をスタートさせた。主婦、会社員など各年代の女性たちが集まり、設置する雪道の歩道を実際に歩き観察して意見を出しあった。

一番意見が多かったのがバス停留所についてだっ

た。バスに実際に乗降する所は歩道でなく車道の端で、車道除雪でツルツルしていたり、逆に除雪の雪が寄せられ残っているなど、危険を感じている人が多かった。また、除雪後の横断歩道もツルツル滑り危険だ。厳密にはどちらも歩道部分ではなく車道部分だが、歩道の延長上が一番危険な箇所なのだ。こうした意見に国土交通省担当者の対応は素早かった。歩道の予算だが実験的にやってみようというのだ。ただし国道など幅の広い道路の横断歩道は、雪の段差ができるなど危険が大きく課題も多いため現状では融雪は難しいが、バス停留所と小路の横断歩道融雪はさっそく取り入れられ、次の冬に実現した。

実際に利用する生活者の意見を、行政が柔軟に取り入れ施工し、次の冬に利用できたのは感動的で画期的なことだ。その後も「雪みち観察会」は国、県、市の道路および雪対策の担当者と一緒に観察活動を続けている。

#### 4—雪道文化の楽しみかた

青森市の国道歩道融雪事業で、バス停の車道と歩道部分が融雪され安全になったのだが、雪の多い時には機械除雪された雪が残っていて乗降の邪魔になる。ほんの少し人力で雪を除けばもっと使いやすくなる。ここでも「雪みち観察会」からバス停留所に雪ベラを設置しようというアイデアが出され、この1月に4カ所のバス停留所に実験的に設置され話題となった。バスを待つ人がボランティア精神で雪を寄せているのを何度か見かけた。「厳しい豪雪の中ほっとさせられる、もっと置く箇所を増やして」との便りも届いている。

このように「雪みち観察会」からいろいろなアイデアが出され、歩行者の雪道が楽しくなっている。



■写真5ー豪雪の時もほっとする融雪歩道



■写真6ー「小春通り祭」

国道2kmの歩道融雪設備が今年完成した。昨年の豪雪時にも雪のない歩きやすい歩道を歩いて、豪雪から一時解放されほっとした気分になった。しかし歩道をすべて融雪するのはランニングコストの面からも不可能である。スポット的にバス停留所を融雪し雪ベラも置いて、雪降るまちのオアシスにというアイデアもある。

また国道融雪歩道が完成したら、ほかには雪があってもそこだけは足元を気にせず歩けるから、オシャレをして歩きたいと「雪みち観察会」で話していたが、この2月に「歩いて楽しむ小春通り祭」として実現した。

完成した国道融雪歩道沿いには、大企業の支社や支店、日本銀行青森支店など金融機関も多い。しかしそうした企業は東京など雪のない地域の企業が多いこともあって、融雪歩道が設置されているのは当たり前と無関心だ。そこで雪と雪道に関心をもってもらおうと「雪みち観察会」が呼びかけ「雪みちづかい懇談会」を組織し、「小春通り祭」を主催した。

1700個のキャンドルが沿道を飾り・歌やバンド、津軽三味線、ハンドベルなどの演奏があり、沿道企業が参加したクイズラリー、お汁粉など各企業の振る舞いもにぎにぎしく、戌年にちなんだ犬のファッションコンクールも行なわれ、遊び心手作り心いっばいの祭となった。祭の当日2月17日は猛吹雪で大変だったが、18日は晴れて暖かいイベント日和となった。祭以降穏やかな日が続いて除雪車が出動するような降雪はなく、この祭が春を呼んだと喜ばれた。

#### 5—夢は「雪片づけロボット」の歩道除雪

雪道や雪仕様の自動車対策が真剣に検討されるようになったのは、ごく最近だ。安全な雪道の課題はまだ多く、特に歩道はこれからだ。そして、その基本の雪道対策は「こみせ」の思想に通じる、単に行政に頼るだけではなく、行政と色々な立場の人が協力しあうことが、

新たな雪道文化創造へつながっていくことになるのではないだろうか。

またこれからの雪道づくりと対策には、最先端のインテリジェントな技術や方式を積極的に導入しなければ雪道の安全、安心、快適は獲得できないのではないだろうか。雪が冬の交通のバリアにならないための近道である。

青森市ではユビキタスシステムの「ゆきナビあおもり」の実験が行われている。ユビキタスコミュニケーターが雪道情報など街情報を提供し、目の不自由な方や高齢な方など歩行者を支援するプロジェクトだ。地域の人から、土地を知らない旅行者まで安心安全に雪道を歩ける日がくるのを期待している。

こうした最先端の技術導入と同時に、雪をしっかりと観察し、上手に付き合ってきた昔からの知恵や工夫を見なおし活用する事も重要である。そして自然への謙虚さも忘れてはならない。

またここに暮らす者同士が暮らしのマナーを守って助け合う気持ちや、雪国を豊かにするのではないだろうか。

人口30万人豪雪都市の冬の暮らしは実際大変なことが多いが、雪を美しいと感じる心のゆとりや、雪道など雪国暮らしの対策も、遊び心で考える余裕が大切ではないだろうか。

もう10年以上前から、雪道の委員会などで歩道除雪に「雪かたづけロボット」と夢のような発言をしてまじめな他の委員たちを驚かせている。最近は癒しロボットや介護ロボットなど開発され、「雪かたづけロボット」も夢ではない。誰もまだ通っていない朝の雪道をロボットがせっせと雪をかたづけしている。想像するだけで楽しい。お年寄り住宅の雪かたづけも、危険な屋根の雪おろしもロボットがしてくれる。「雪かたづけロボット」が実現すれば、加速する少子高齢化の雪国にとってどんなに助かるだろうか。そんな日がきてほしい。



■写真7ーインテリジェントな雪道歩道をめざす「ゆきナビ青森」の実験